

Il était une bergère について

吉 田 正 明

現代のフランス人にもよく知られており、昔から愛唱され歌い継がれてきた俗謡の一つに *Il était une bergère* がある。

この歌は今日では子供向けの歌に分類されているが、その起源や来歴を探ると意外な事実突き当たる。現在知られているような歌詞が作られたのは18世紀中葉、ルイ15世の時代だとされている¹⁾。とすると、この歌が誕生した時代背景としてよく引き合いに出される、マリー・アントワネットが農家風の暮らしを宮廷で流行させる以前からすでに口ずさまれていたことになる²⁾。現在では、羊飼いの娘が言いつけに背いてチーズの中に顎を突っ込んだ子猫を棒で打って罰する6番までしか歌われないが、実は19世紀まではその続きの7番から最後の10番まで歌われていたという³⁾。

なにはともあれ、まず第1歌節から第6歌節までを見てみることにしよう⁴⁾。

1. *Il était une bergère,*
Et ron et ron petit patapon,
Il était une bergère
Qui gardait ses moutons,
Ronron
Qui gardait ses moutons.
2. *Elle fit un fromage,*
Et ron et ron petit patapon,
Elle fit un fromage
Du lait de ses moutons,
Ronron

Du lait de ses moutons.

3. Le chat qui la regarde,
Et ron et ron petit patapon,
Le chat qui la regarde
D'un petit air fripon,
Ronron
D'un petit air fripon.

4. — Si tu y mets la patte,
Et ron et ron petit patapon,
Si tu y mets la patte
Tu auras du bâton,
Ronron
Tu auras du bâton.

5. Il n'y mit pas la patte,
Et ron et ron petit patapon,
Il n'y mit pas la patte
Il y mit le menton,
Ronron
Il y mit le menton.

6. La bergère en colère,
Et ron et ron petit patapon,
La bergère en colère
Battit son p'tit chaton,
Ronron
Battit son p'tit chaton.

このように、現在歌われている部分だけからすると、動物に対するいくぶん残酷な仕打ちは見られるものの、猫へのお仕置きのたわいない歌にしか見えない。それに、罰せられる猫の立場に立ってよくよく考えてみると、完全に言いつけに背いたわけではないのである。というのも、チーズの中に入れたのは禁じられた「脚」ではなく「顎」だったのだから。猫としてはうまくしてやったりとほくそえんだことであろう。もちろん羊飼いの娘にとっては、入れられたのが「脚」であろうが「顎」であろうが、チーズを食べられてしまったことには変わりなく、怒って子猫を棍棒でたたくのも無理からぬことではあろう。こともあろうに、人様のものを畜生が盗み取ろうとは。彼女にしてみれば警告どおり動物を罰したまでのことである。いずれにせよ、ここまでは、いくぶん粗野で血の気の多い羊飼いの娘と狡猾な子猫を、お決まりのチーズ取りのエピソードにからめて滑稽に描き出した歌にすぎないように見える。

では、この後の歌詞はどのように続いていくのであろうか。以下、後半の第7歌節から第10歌節までを見てみよう。

7. Elle fut à confesse,
Et ron et ron petit patapon,
Elle fut à confesse
Obtenir son pardon,
Ronron
Obtenir son pardon.

8. — Mon père, je m'accuse,
Et ron et ron petit patapon,
Mon père, je m'accuse
D'avoir tué mon chaton,
Ronron
D'avoir tué mon chaton.

9. — Ma fille pour pénitence,

Et ron et ron petit patapon,
Ma fille pour pénitence
Nous nous embrasserons,
Ronron
Nous nous embrasserons.

10. — La pénitence est douce,
Et ron et ron petit patapon,
La pénitence est douce
Nous recommencerons,
Ronron
Nous recommencerons.

なんと、羊飼いの娘は自分の子猫を棍棒で叩き殺してしまったのである。なるほど、ここまでくるとさすがに子供たちには歌わせるわけにはいかないのも頷ける。さらには、いくら罰とはいえ自分の子猫を殺めてしまった羊飼いの娘が聴罪司祭のもとへ懺悔しに行くと、贖罪として抱き合って接吻することを求められ、罪の償いがこんなに甘美なものならもう一度やり直しましょうと、好色な司祭の手管に無邪気に従う女の性が皮肉られる結末となってしまうのである。第7歌節以降が抹消されたのもむべなるかなである。

19世紀中葉に編まれた *Chansons et Rondes enfantines* (1858) によると⁵⁾、7番の歌節にさしかかると聴罪司祭役を演じる男の子が一人選び出され、輪の中で彼の前に跪いて懺悔する女の子の手を取って立ち上がらせ、身振りを交えて償いの接吻の場面を歌いながら演じ、最後に二人で手に手を取り合って最終歌節の「La pénitence est douce / Nous recommencerons.」を周りで輪舞するみんなと大合唱して踊ったというのだから、子供の遊びの歌としてはいささか不謹慎な内容であったと言わざるをえない。あるいは当時は今よりもおおらかであけすけな時代だったと言うべきであろうか。

ともあれ、この歌は前半部と後半部とではその内容ががらりと変ってしまう歌であることは以上見たとおりである。第6歌節までは、のどかな農村生活の

一情景を書割にして、羊飼いの娘と彼女の飼い猫とが登場し、言いつけに背いてチーズに口をつけてしまったその子猫を、棒で打ちすえて罰するというものである。ところが後半部では、猫殺しを犯してしまったうぶな娘を籠絡する好色な司祭が登場し、彼のもとに懺悔に訪れた彼女はまんまとその手管にひっかかってしまい、さらにはその淫らな行為によって彼女の官能が目覚めてしまい、あげくの果てに自ら積極的にその快樂に身をまかせようとするふしだらな娘の本性を露にしてこの歌は閉じるのである。しかし、このようにこの歌を単純に表面的にのみとらえてしまうと、前半部と後半部とでは筋もテーマもどことなく違和感があり、なにかつぎはぎのような、ちぐはぐな感じを与えてしまう。この歌の作者は、はたしてなにを意図してこの歌を作ったのであろうか。

ところで、この歌の原旋律 *timbre* は 1570 年から *Laissez paître vos bêtes* という題の歌に用いられていたもので、その後反ユグノーの歌やガスコーニュ地方のクリスマスの歌などに使われた後、緑日の芝居で用いられていたことが知られている⁹⁾。歌詞の作者は不詳であるが、実はこの歌には、ルイ 15 世治世下のいくぶん放埒な時代精神を反映して、エロティックな意味が巧みに折り込まれているのである。

ロバート・ダーントンは『猫の大虐殺』において、18 世紀当時の「猫」に込められたエロティックな意味や修辞法を明かにしている⁷⁾。古代エジプト以来、猫は神秘的な存在として人類を魅了し続けてきた。ボードレールのような詩人、あるいはマネのような画家の心をとらえてきたのも猫である。猫はとりわけ日常生活の最も内密な部分、すなわちセックスに結びついていた。フランス語で猫を表す « chat », « chatte », « minette », あるいは英語の « pussy » という語は俗語で「女性の性器」を表す語として用いられてきた。またフランスの民間伝承では、猫を性的な隠喩として特に重要視してきた。要するに猫は生殖と女性のセックスとを暗示しているのである。

このような観点から件の歌を再検討してみると、そこには隠された同一のテーマが浮かび上がってくる。アルフレッド・デルヴオーが 1864 年に著した *Dictionnaire érotique moderne* を見ると、« laisser le chat aller au fromage », あるいは « le chat a mangé le fromage » といった表現が「処女喪失」と同義に使われていたことが分かる⁸⁾。デルヴオーの同辞典によると、やはり « chat » という語はエ

ロティックな言語では「女性の性器」を意味し、「fromage」は「精液」を意味すると書かれている。この歌が後半部を切り取られ、子供の歌として意味を和らげて採用された19世紀後半においても、まだその卑猥な裏の意味が完全には払拭されてはいなかったのである⁹⁾。

時代をさらに遡れば、このシャンソンの元歌とおぼしき歌詞が1543年にAlain LOTRIANTによってパリで出版された*Sensuyt plusieurs belles chansons nouvelles et fort joyeuses*の中に見出される¹⁰⁾。それは次のような歌である。

Mon père avoit quatre vaches
Et ma mère vingt et quatre
Et je les meis en herbage.
« Ma fille mais que tu soys sage
Tu les auras en mariage.
—Mère n'y seray point sage
Car j'ay perdu mon pucelage
A ung garson de village.
Je l'ay baillé pour ung fromage.
Je le mis sur une table
Nostre chat vint qui le happe
Au chat au chat ta malle rage!
Tu as mangé mon pucelage.

このように、この歌では、チーズと引き換えに男の子に処女を奪われた娘が、うかつにもテーブルに置いていたその大切なチーズを猫に食べられてしまう。娘が猫に向かって、「Tu as mangé mon pucelage.」と嘆いても後の祭。明かに処女喪失がテーマになっているのである。処女を奪われた娘にとっては、まさにチーズ一個の教訓の価値ありきである。

こうして見ると、もともとはかなり露骨な内容の歌であったことが分かる。件の歌の作者は、こうした露骨な原歌をオブラートに包み、滑稽な筋立てをカモフラージュにして、エロティックな暗示的意味を裏に隠して、その歌に二重

の意味を持たせていたのである。

ここまでくるとすでにこの歌の秘められた意味はお分かりであろう。羊飼いの娘が守ってきた「羊」がなにをほのめかし、警戒していた「猫に食べられてしまったチーズ」が象徴するものがなんであるかは明かである。確かにこの歌には元歌にあるように処女を奪った男の子は出てこない。しかし « patte », « bâton », « menton » がなにを暗示しているかは明白である。殴打されて殺されてしまった子猫 (« Battit son p'tit chaton » とあるように、「小さな子猫」とことさらに冗語法を使用することで裏の意味がほのめかされている) の意味も、流された血 (明示されているわけではないが、当然猫殺しから想像しうる) が象徴するものも今となっては明らかであろう。また、この歌には猫がゴロゴロ喉を鳴らすときの « ronron » という擬声語が使われており、性的快感が音によっても暗示されているが、 « petit patapon » というはやし言葉にも女性のセックスがほのめかされているのではなかろうか。なぜなら、 « petit » という形容詞が多く of 卑猥な意味を暗示する表現を作り出していることがデルヴオーの辞典からも確かめられるからである。この歌では、クライマックスの第9、第10歌節に至ると、恍惚となった猫の « ronron » という鳴き声を助長するかのように同じ [ron] という音が脚韻として執拗に繰り返される。これは発情した牝猫の唸り声の擬態ともとれよう。

しかし表向きの意味を無視して、裏に隠された意味のみに焦点を当てればそれですむというわけでもない。作者の意図がどうであれ、この歌には別の解釈も成り立つのである。つまり、この歌で暗示されているのは処女喪失のテーマだとしても、羊飼いの娘は後半において罪の意識を持ち、それを懺悔しに行くのである。猫殺しは処女喪失を暗喩すると同時に、官能の目覚めと猫を罰することで処女喪失の恨みを晴らすという乙女のアンビヴァレントな心理の表徴ともとれるのである。さらに言えば、司祭 père と娘 fille との関係性を父と娘の関係に転置すると、近親相姦、あるいはエレクトラ・コンプレックスまでも射程に入れなければならなくなってくるだろう。このあたりが、作品解釈の難しさであると同時に面白さでもある。要はこの歌が、その二重の意味を十分に把握して歌われてきたか否かは別として、フランスの民衆文化、あるいは民衆の心性を映し出す鏡としてわれわれの目の前に現前しているということが肝要なの

である。一つの歌が当時の人々のメンタリティーを伝えてくれるということ、民衆文化の基層を理解する糸口を与えてくれるということ、この歌の解釈からわれわれは学びとらなければならない。

この歌は、中世以来フランス文学の一つのテーマとして田園詩 *bergerie* の中で描かれてきた、羊飼いの男女の睦みごとの伝統を踏まえ、ある意味でいつも男の犠牲となってきた結婚前の娘への陵辱を、民衆のシャンソンの語り口を借りて、滑稽な筋立てのオペラートで巧みに包み込んで創作されたものではなかったであろうか。

最後に、動物虐待と猫との関係に触れて本稿を閉じることにする。この歌でも描かれているように、裏の意味とは別に、棒で虐待を受ける（殺されてしまうわけだが）動物は猫である。再びダントンの書物を援用しながら¹¹、フランスにおいて（あるいは汎ヨーロッパ的と言えるかもしれないが）猫がどのような存在であったのかを簡単に見ておこう。

ダントンによれば、猫には〈儀式価値〉が備わっているという。民衆がシャリヴァリを行うときの格好の動物は猫である。猫を虐げることは、近世初期のヨーロッパに広く流行した娯楽であった。猫殺しは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』からゾラの『ジェルミナール』に至るまで、文学作品の共通テーマであった。猫いじめは民衆文化の基層にある心性の表れの一つなのである。フランス各地で猫への虐待が行われていたことがその証左である。例えばコート・ドール県では、四旬節の第一日曜日に、子供たちが猫を竿に縛りつけ焚火の上であぶる風習があった。聖ヨハネの祝日に猫を火あぶりにする風習はいくつかの地方で見られたものである。猫は他のどの動物よりも象徴的価値を有していた。猫への虐待はその象徴価値をぬきにしては語れない。

猫は魔力を暗示する動物であった。夜に猫とすれ違うと、魔女に出くわす危険があった。白猫は黒猫同様、邪悪な存在であった。魔女たちは、すきをついて村人たちに魔法をかけるために猫に変身した。猫の魔力から身を守るには、猫の尻尾と耳を切り、脚を一本叩きつぶし、毛皮を引き裂くか焼けばその魔力は失われる。少なくとも、そのように信じられていた。

猫はまた、魔女や悪魔とは無関係に、一種の魔力を有していた。ブルターニュでは、漁師が猫とすれ違うと、その日は不漁になった。ベアルンでは、猫を生

き埋めにすれば、畑に草が生えなかった。猫はまたあらゆる民間療法に登場する。例えば転んで怪我をした場合には、切断したばかりの牡猫の尻尾から血をすするとよい。肺炎を治療するには、猫の耳から取った血を赤ワインに混ぜて飲む。猫の排泄物を葡萄酒に混ぜれば、腹痛の薬になる。ブルターニュでは、殺したばかりのまだ温かい猫の脳髓を食べれば、透明人間になることさえできた。また、新築の家を守るために、フランス人は猫を生きのまま壁に閉じ込めた(ポーの『黒猫』の着想もそこから得たものではなかろうか)。中世の建築物の壁から猫の遺骨が出てくるのを見れば、この風習が古くから存在したことが分かる。

フランス語の言い回しの中にも猫への虐待を窺わせる表現を見つけることができる。他にすることがあるときに « avoir d'autres chats à fouetter » と申し、犯した過ちがたいしたことではないときは、« Il n'y a pas de quoi fouetter un chat » と表現する。「chat à neuf queues」は、昔軍隊で用いられていた拷問用鞭のことである。フランスでは、猫は鞭で打たれる存在なのである。イギリスでは、ビアスの『悪魔の辞典』によると、猫は、むしゃくしゃしたときに袋づめにし蹴飛ばされる動物である。

このように、猫は、西洋において受難の歴史を生きてきたかわいそうな動物なのである。だから、羊飼いの娘が自分の子猫を棒でたたき殺したからといって、当時の人々にはそれほど残酷な仕打ちには見えなかったのかもしれない。

注

- 1) Martine DAVID, Anne-Marie DELRIEU, *Aux Sources des chansons populaires*, Belin, 1984, p.296. (以下 M.D. と略記する。) なお、本稿執筆にあたり、前掲書の他に次の本を適宜参照した。Jean-Claude KLEIN, *Florilège de la chanson française*, Bordas, 1990.
- 2) ルイ 16 世の時代に、王妃マリー・アントワネットと彼女の取巻きたちが羊飼いななどの農村風の暮しぶりを流行させたことはよく知られている。彼らは自ら羊たちを小屋まで導くことさえ厭わなかった。この *Il était une bergère* という歌は、当時は農村よりもむしろ宮廷においてよく歌われていたという。Pierre CHAUMEIL, *Le Premier Livre des chansons de France*, Gallimard, 1984,

pp.34-35. 参照。

- ³⁾ M.D., *op.cit.*, pp.294-296.
- ⁴⁾ 歌詞の引用は, Patrick MOULOU, *Le Livre d'Or de La Chanson Traditionnelle Française*, Marabout, 1993, pp.110-112. に拠る。この歌は, 収められた版により若干の異文は見られるものの, 大筋ではさしたる違いは見られない。
- ⁵⁾ M.D., *op.cit.*, pp.294-295.
- ⁶⁾ M.D., *Ibid.*, p.297.
- ⁷⁾ ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』, 岩波書店, 1996, pp.111-153. 参照。本稿のこの部分と最後の論考は主にこの書に負っている。
- ⁸⁾ Alfred DELVAU, *Dictionnaire érotique moderne*, Slatkine Reprints, Genève, 1968, p.200.
- ⁹⁾ 大革命以後フランスではロマンスが流行する。その流行に駆逐されてかつての田園歌 *bergerie* は時代遅れとなる。アンシアン・レジーム期のそうした流行遅れとなったシャンソンを収集して子供向けの歌として再生させたのはデュ・メルサンであった。ただし教育的配慮から, 彼はあけすけで露骨な部分を書き直したり削除したりした。DU MERSAN, H. COLET / CHAMPFLEURY & J.-B. WEKERLIN, *Chansons populaires des provinces de la France*, Paris, Garnier Frères, 1860. 参照。
- ¹⁰⁾ M.D., *op.cit.*, p.297.
- ¹¹⁾ 注 7) 参照。

Sur une chanson populaire *Il était une bergère*

Masaaki YOSHIDA

Il était une bergère est une des chansons populaires françaises bien connue. Elle est actuellement classée parmi les chansons enfantines. La chanson actuelle ne se chante que les premiers six couplets qui nous semblent anodins malgré une histoire un peu cruelle du châtiment d'un chaton. Or, au dix-neuvième siècle, cette chanson avait une suite jusqu'au dixième couplet qui raconte une histoire licencieuse de la bergère et de son confesseur.

En général, la genèse des paroles tels qu'on les connaît aujourd'hui est associée très souvent à l'époque où Marie-Antoinette mit à la mode dans la Cour l'élevage des moutons et les travaux aux champs. Mais en fait, sa composition remonterait au milieu du siècle des Lumières. Il est probable qu'une plume lettrée mais anonyme composa, sur un air connu au Théâtre de la Foire, ces paroles fort adroits à double sens, bien dans les grâces de l'époque libertine de Louis XV.

Les travaux historiques récents de Robert Darnton nous ont appris à déchiffrer l'expression argotique du langage animalier félin du siècle des Philosophes. Or, que raconte la chanson? La mort d'un chaton, battu par la bergère; celle-ci le punit pour avoir désobéi en mettant son menton dans le fromage. Le sens de la chanson s'éclaircira quand on aura précisé que des expressions telles que « laisser le chat aller au fromage » ou « le chat a mangé le fromage » étaient synonymes de perte du pucelage.

D'ailleurs, si l'on remonte jusqu'à l'époque de la Renaissance, on peut en trouver une chanson originale beaucoup moins innocente dans *Sensuyt plusieurs belles chansons nouvelles et fort joyeuses*, publié chez Alain LOTRIANT, à Paris, en 1543. On y raconte explicitement la perte du pucelage d'une jeune fille.

Après la Révolution, et en pleine vogue de la romance, les chansons populaires d'Ancien Régime apparurent un peu désuètes. C'est alors que DU MERSAN récupéra un certain nombre de ces airs pour en refaire des chansons enfantines. Il en modifia parfois les paroles, changeant un mot ici, retirant un couplet là. *Il était une bergère* fut ainsi travestie en ronde enfantine.

Quoi qu'il en soit, cette chanson à double sens se présente à nos yeux comme un miroir reflétant une culture et une mentalité populaires françaises comme la perte du pucelage, ou bien les brutalités envers les chats considérés en Occident comme un animal maléfique et de mauvais augure, associés à la Sorcière.